

古川製陶

武雄市



県内は全国有数の米どころ。水稻栽培で重要なのは水の管理だ。30㌢の水田には通常、深さ約60㌢の基盤土の中に長さ100㌢の暗渠3本が埋められている。水田の水は干拓地に水田が広がる佐賀、白石平野。60年代からの土地改良事業で素焼きの土管暗渠から直径50~60㌢の合成樹脂管への転換が進み、今では暗渠のほぼ全部が樹脂管と

う。千拓地に水田が広がる佐賀、白石平野。60年代からの土地改良事業で素焼きの土管暗渠から直径50~60㌢の合成樹脂管へ

水田の土管暗渠普及に情熱



「環境に優しい素焼き土管」にこだわり続ける古川社長(左)=武雄市橋町で

「きれいな環境次世代に」

明治初期、初代・古川形右衛門が大がめ、たらい、すり鉢などの製陶所を設立。大正後期から暗渠用の土管製造。敬通社長は5代目。従業員は社長を含めて8人。資本金1千万円。

かかるため放置されているのが現状です。樹脂管は腐らないで永久に残り、環境ホルモンなど農地の汚染が心配です」

「環境は未来の人たちからの借り物」という言葉があります。きれいに使つて次世代に引き継ぐのが義務です」。土管暗渠が県内の水田に広まることを願っている。

耐用年数は約10年。管が地圧でつぶれたり取水用の小さな管の穴が目詰まりしたりすると、古い暗渠の脇に新しい樹脂管を埋める。だが、古い管はほとんど残されたままで

会社は肥前の大がめ産地だった武雄市橋町にある。大がめの需要が減った戦後、土管と陶器製造に84年に死去した父の跡を継いたが、樹脂管への流れの中で「環境に優しい素焼き土管」製造にこだわり続けている。大分県では約20年前から土管の効能に注目。注文を一手に引き受けている。「素焼きの土管は地球上のあらゆる『いきもの』となじみます。食の安全のためにも土管の見直しが急がれます」。浸透性が良く長持ちをする商品開発に従業員とともに取り組む。